

# 十九世紀前半彦根井伊家の身分構造

梁 媛淋

はじめに

本稿は、十九世紀前半の大名家の身分構造を比較研究する一環として、譜代大名の彦根井伊家を取り上げる。大名家臣団は所属の組や給禄の多寡などによって様々な階層に分けられており、その序列は藩政機構における役職の任命や出陣する時の軍団編成に深く関わるものであった。大名家の身分構造の解明は、近世社会の支配階級である武士の実態を探るのみならず、当時の政治体制を理解する基盤となる。また、武士身分内部の格差は対立をもたらし、これが明治維新やそれに伴う武士身分の解体の一因となったと考えられてきており、本研究はこうした近世から近代への社会的変革を考える手がかりとなるだろう。

大名家臣団については、近世初期、藩政機構が形成・確立される過程に関する藩政史研究において多くの蓄積がある。<sup>②</sup>しかし、それらの多くは大名家の成立期に限定されており、取り上げる事例に旧族大名・織豊取立大名が多く、家臣団における特定の階層にのみ注目することが多いなどという限界が指摘されている。<sup>③</sup>右のような研究状況に対して、磯田道史は武士身分についての理解を深めるため、大名家の地域的・階層的な比較分析を行う必要を提起している。<sup>④</sup>筆者は、その問題提起を念頭に、江戸城内の大廊下・溜間・大広間に席を与えられた大大名について比較分析する研究計画を立てた。分析の時期としては、嘉永六年（一八五三）のペリー来航を機に各地で始まった人材登用や軍制改革の以前に限定し、対象の大名家は、成立時期、領地の拡大・縮小、および地方知行の存続状況などの点に留意して選出することとする。これまで旧族大名の萩毛利家と徳

川將軍家の分家である尾張徳川家について分析してきたが、本稿は譜代の大大名の一例として彦根井伊家を分析する。

井伊家は徳川譜代大名の中の名家であり、江戸城内では溜間に席が与えられ、しばしば大老を務めた。初代井伊直政は天正十八年（一五九〇）に上野国箕輪十二万石に封ぜられ、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦後、佐和山城に転封され、上野国三万石、近江十五万石を領有した。慶長二十年（一六一五）、直政の長男直継が上野国三万石を領有して別家とし、家督は次男直孝が継承した。直孝は慶長二十年、元和三年（一六一七）、および寛永十年（一六三三）に五万石ずつ加増され、近江国に二十八万石、下野国・武蔵野国に二万石、計三十万石を領有した。文久二年（一八六二）、井伊直弼の大老在任中の施策が咎められ、十万石の減封を命じられた。<sup>7</sup> 譜代大名としては、格別に大きい領地が与えられたうえに、領地の変動がほとんどなかった点に特徴があった。

近世後期の井伊家臣団について、『新修彦根市史』第二巻は文政末年の分限帳に基づいて、家臣団の規模や職制を紹介している。しかし、在国の知行取家臣を中心に論じているため、定府の知行取家臣が除外されたこと、蔵米取家臣についての分析が十分とは言えないことなどの問題点がある。一方、近世後期、海防などに伴う再軍備については、岸本覚と母利美和の研究がある。<sup>9</sup> 岸本覚によれば、井伊家は弘化四年（一八四七）に相州警衛を担当するに際し、小手

分備という新たな軍事編成を施行し、西洋の砲術を取り入れた。母利美和は、こうした改革が行われる以前、井伊家が寛政・文化期（二七八九〜一八一七年）に従来の五備六隊を基本としながら軍事組織の再編成を試みたと指摘している。これらの先行研究によつて、幕末期の井伊家の軍団編成はかなり解明されてきた。しかし、軍団を含む家臣団全体の構造はいまだ明らかでない。

以上述べてきたことをふまえて、本稿では、文政十一〜十三年（一八二八〜一八三〇）に作成された分限帳を主な素材として、三節にわけて井伊家臣団の身分構造を解明したい。第一節では、分限帳における家格の記載に基づき、家臣の基本的な所属階層を提示する。この際、それぞれの所属階層における家臣の出自や家督状況、御目見や騎馬の資格・相続の異同に着目する。第二節では、分限帳に見える給禄の記載に基づき、家臣団全体の石高分布を明らかにする。石高分布の特徴については、彦根井伊家で実施された給禄政策から解明する。第三節では、文政末年における家臣の役職就任について検討する。「役附帳」・「土組附帳」に記載された役職の就任状況を分限帳の記載と照らし合わせることによつて、家格・給禄と役職就任との関連性を考察する。こうした分析を通して、彦根井伊家の事例から観察された事実のうち、いずれを他の大大名にあてはめることができるか、末尾で若干の展望を示したい。

## 一 井伊家の階層構成

### (一) 史料の概略

本稿で扱う史料は、彦根城博物館に所蔵される分限帳である。「分限帳」(調査番号八六一)、「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」(同八六六)、および「定府分限并子共年付帳」(同八六七)が現存する。この三つの史料は、御歩行以上の家臣の家名・給禄・年齢・所属組などを記している。記載された人名を後述する由緒帳に照合してみた結果、これらは文政十一年(一八二八)四月以降に作成されたものであり、張り紙や追記で訂正を加えているのは、文政十三年(一八三〇)十二月中旬までの家臣の代替りの状況を示すものであったと推定できる。分限帳の記載に基づいて、まず家臣の所属階層を明らかにし、次に給禄の記載をもとに統計分析を行い、家臣の石高分布を明らかにする。

一方、明治三年(一八七〇)以前の井伊家家臣の由緒・任職の昇進・賞罰などの履歴を記す史料が現存する。井伊家は元禄四年(一六九一)から数年置きに家臣に由緒書を提出させた。家臣の由緒書は御目付役によって整理・保管されていた。<sup>⑩</sup>彦根城博物館蔵「侍中由緒帳」<sup>⑪</sup>(調査番号六二八・六九三、以下では「由緒帳」と呼ぶ)は第一号から第七十号までであるが、第二十四号は欠本である。表紙

は「侍中由緒帳」、「医者由緒帳」、「彦根御歩行由緒帳」、「江戸御歩行由緒帳」、「伊賀御歩行由緒帳」、「七十人組歩行由緒帳」および「能役者由緒帳」の七種類がある。他に表紙がないものが一冊(内容は江戸御歩行の記録)、内容が重複したものが二冊ある。

犯罪などによって絶家となった家臣の奉公履歴は、「彦根江戸侍中跡絶帳」(調査番号六九三・七〇三、以下「跡絶帳」<sup>⑫</sup>)として現存する。全八冊であるが、重複した三冊を含めて十一冊がある。欠落した部分もあるが、分限帳に記載された家臣のうち、九割以上は「由緒帳」・「跡絶帳」で身元を調べることができるので、階層分析を補完するために使用する。

### (二) 分限帳の階層記載

「分限帳」、「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」および「定府分限并子共年付帳」に記載された家臣は、張り紙で抹消された者を除くと、表1にまとめることができる。<sup>⑬</sup>

表1の概要は次の通りである。①「分限帳」には知行取以下御歩行格まで、計八七二人が記されている。このうち、給禄が記されていないのは、隠居、若殿様御小姓当分御雇、御中小姓格并並・筑後様御近習の一部および御歩行格、計九十八人である。隠居は知行取家臣で隠居した者である。②「定府分限并子共年付帳」は知行取以下御歩行以上の家臣および家臣の家族、計一八三人が記されている。

このうち、給禄が記されていないのは、御小姓衆の一部、隠居、御知行取子共年附惣領之分年附、養子惣領之分年附、末子之分年附、弟之分年附、および御切米取子共年附、計四十九人である。③「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」は伊賀御歩行二十人、七十人御歩行

知行取家臣は石高の高い順から記されており、その給禄は最低五十石で、最高一万石であった。在国の知行取家臣の中で、二十七人は「帰参」と注記されている。これらは延宝六年（二六七八）に一度井伊家から追放され、元禄十年（二六九七）に再出仕した家で

表 1 井伊家家臣の所属階層

階層記載	在国（人）	定府（人）	伊賀・七十人歩行（人）
※知行取	487	58	0
荒地取郷士	4	0	0
御扶持方取衆	29	8	0
隠居	*80	*5	0
御小姓衆	22	4(*2)	0
若殿様御小姓当分御雇	*4	0	0
御中小姓衆	15	0	0
御中小姓格并並	5	0	0
御扶持切米取医者衆	9	1	0
御騎馬徒衆	128	33	0
御切米跡御扶持方取衆	11	0	0
筑後様御近習	13(*10)	0	0
御歩行衆	61	32	0
御歩行格	*4	0	0
御知行取子共年附惣領之分年附	0	*15	0
養子惣領之分年附	0	*2	0
末子之分年附	0	*7	0
弟之分年附	0	*10	0
御切米取子共年附	0	*8	0
伊賀御歩行衆	0	0	20
七十人御歩行衆 脇伊織組	0	0	33
七十人御歩行衆 戸塚佐太夫組	0	0	31
総人数	872	183	84

註

- (1) 在国家臣は「分限帳」、定府家臣は「定府分限并子共年付帳」、伊賀御歩行・七十人御歩行は「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」による。
- (2) ※印がついた者は、史料上、家格の記載がなく、知行の高い順で記されている家臣である。
- (3) 「御切米取子共年付」までの階層順は史料の順番に従うことを原則とする。ただし、定府の「隠居」は「御歩行衆」の後、「御知行取子共年附惣領之分年附」の前に記されているが、便宜上、分限帳と同じ順番で並べる。
- (4) \*印がついた者は石高が記されていない。a(\*b) は a 人のうち b 人は石高記録がないことを示す。ただし、在国隠居のうち一人は御扶持方取衆に、御中小姓格并並のうち二人は御中小姓衆に名前が二重に記されているが、こうした重複記載は表 1 に反映されていない。

二組で六十四人、計八十四人が記されている。以下では、地位の高い順に基づいて各階層の内訳を見てみよう。「分限帳」と「定府分限并子共年付帳」の冒頭には、知行取家臣が記されている。在国は四八七人、定府は五十八人、計五四五人である。ただし、当時、先代が隠居・病死のために抹消され、息子がまだ家督を相続していない者は三人いたが、彼らは表 1 の知行取人数に反映されていない。

ある。<sup>14</sup>「由緒帳」によれば、知行取には医者が含まれている。医者を除き、すべて騎馬の資格を持ち、持ち馬を飼うことが義務付けられていた。<sup>15</sup>なお、知行取家臣の役方・番方の編成は別の史料に記されている。これらについては第三節において述べる。

次の荒地取郷士は四人おり、いずれも百石取である。『彦根市史』では「荒地の開墾などに従事した士分の者」とし、寛永十一年（一六三四）に郷士を取り立てた例があったと指摘している。<sup>16</sup>しかし、「分限帳」に記された四人は寛政元年（一七八九）から文政十年（一八二七）までの間に拝知したので、郷士は一代限りのものと思われる。彼らは役職についておらず、由緒帳にも名前が見当たらないため、実態が不明である。

御扶持方取衆は、在国二十九人、定府八人、計三十七人いた。彼らは先代が夭死したことや幼年家督によつて知行を取り上げられ、扶持取にされた。「分限帳」には当時の給禄と共に本知（親の給禄）が注記されている。「由緒帳」で追つていくと、彼らは後年に新知を与えられたが、本知より十〜二十石の減知となった。

御小姓衆は、在国二十二二人、定府四人、計二十六人いた。御小姓は通常、二五〇石以上の家臣の嫡子が務め、家督を相続するとともに「御近習御免」を命じられたが、千石以上家臣の次三男が「一代切」で召し出された例もある。<sup>18</sup>次の若殿様御小姓当分御雇は在国の四人のみで、五百石以下の家臣の次三男が勤めていたが、彼らは一

代切とは記されず、給禄も記されていない。

次に御中小姓衆十五人、同格・並の者五人、計二十人が記されている。御中小姓は『彦根市史』では三百石以上家臣の嗣子が勤めた<sup>19</sup>とされている。しかし、「由緒帳」で調べた結果、当時御中小姓衆に列した者はほとんど当主である。父祖の代から御中小姓に列した者が多いが、絶家となった知行取の家を復興して降格となった者が一人、御歩行から昇格した者が二人、および知行取家臣の嫡子一人がいた。<sup>20</sup>また、この中で、御祐筆役・御鷹役・御医者・御馬医などを勤める者がいた。以上のことを考えると、御中小姓は御小姓衆のように近習の役回りを担当する者ではなく、知行取と御騎馬徒の間的な地位としてとらえるべきであろう。

御扶持切米取医者衆は、在国九人、定府一人、計十人いた。そのうち、知行取で減知された者が一人、知行取医者の嫡子二人もこれに含まれている。

次は御騎馬徒衆である。在国一二八人、定府三十三人、計一六一人いた。「由緒帳」によれば、御騎馬徒は御歩行と同様、井伊家当主の京都上使・日光山代参・参勤交代などに御供するのが主な役目であった。従来、御騎馬徒は知行取家臣の子息が家督相続前に務めるものとされてきた。<sup>21</sup>しかし、「由緒帳」によれば、御騎馬徒衆の身元は、①御騎馬徒の家を家督相続した者、および②二五〇石以下知行取家臣・御中小姓・御騎馬徒の子息で家督前に登用された者に

区別できる。身元の確認ができない十人を除き、①は「分限帳」に六十八人、「定府分限并子共年付帳」に八人、計七十六人、②は「分限帳」に五十四人、「定府分限并子共年付帳」に二十一人、計七十五人いた。<sup>22)</sup>このように、御騎馬徒衆の中で、当主と子息召出の比率がほぼ同じであった。

御切米跡御扶持方取衆は、御中小姓や御騎馬徒の格式を持つ者が何かの原因によって減知された者で、計十一人いた。「分限帳」には、「御中小姓跡」「御騎馬徒跡」とともに「本拾人扶持」のように父の給禄が記されている。

筑後様御近習の項には十三人が記されている。「筑後様」は井伊家十一代目当主直中の六男中頭である。冒頭の三人は知行取家臣の次三男で分家を取り立てられた者であり、後年に御騎馬徒衆に列した。<sup>23)</sup>しかし、彼らの次に記された給禄不明の十人は筑後様御近習ではない。「由緒帳」で確認できたのは九人であるが、彼らは五百石以下の家臣の次三男であり、鉄三郎など井伊家の庶子附の伽頭に雇われていた。

御歩行衆は在国六十一人、定府三十二人、計九十三人いた。在国御歩行のうち十二人、定府御歩行のうち五人は御騎馬徒や御歩行の息子から召し出された。御歩行は、「由緒帳」において代替りの時に父の「跡式」を継いだという記述が見られず、代々新規召出の形式をとり、所属組の規定された給禄を与えられた。事実上、特定の

家が世襲で御歩行を務めたが、彼らは給禄の継承が許されていない点において、御騎馬徒以上と決定的な違いがあった。この点は伊賀御歩行・七十人御歩行にも共通する。

伊賀御歩行衆は二十人いた。その先祖は伊州阿拝郡の郷土であり、「忍術・火術熟得」していた。彼らは御家老筆頭の木俣家によって代々支配されており、元来足軽以下の身分であったが、安永二年(二七七三)に伊賀御歩行に取り立てられた。<sup>24)</sup>

七十人御歩行衆は二組あり、旗奉行の脇伊織と戸塚佐太夫がそれぞれ支配していた。彼らは元来、旗奉行配下の「七十人衆」であったが、安永二年に御歩行に取り立てられた。組員はほとんど当主であるが、例外として、御騎馬徒伴只七の息子材太郎が召し出された例もある。只七が儒者に登用され、一代限で御騎馬徒衆に昇格したため、その代わりとして材太郎が七十人御歩行に登用されたのである。<sup>25)</sup>

以上、三つの分限帳に記載された階層について述べてきた。「由緒帳」の表紙によれば、医者を除き、知行取以下御騎馬徒以上の階層は「侍」と呼ばれており、三御歩行と区別された。侍と三御歩行は、前述のように相続における違いがあるが、儀礼の面においても次のような相違点が見られる。<sup>26)</sup>侍は御座の間で役職を拝命し、式日に登城して井伊家当主に御目見するのが慣例であった。元日には当主、正月二日には嫡子が階層によって一人・二人あるいは三人ずつで御目見した。それに対し、三御歩行は御座の間で拝命することが

許されず、式日には全員で並んで御目見した。

井伊家は、前述したように侍の夭死・幼年家督に対して減知を命じ、奉公能力の評価に厳しい面があった。しかし、養子相続を許可する面においては寛大であった。「由緒帳」で確認できた者の中で、少なくとも三九一人は養子であり、そのうち病中封養子（末期養子）は六十六人に上った。養子相続は以上の階層ごとに、同格の家と縁組することが一般的であったが、例外として、定府家臣は他の大名家の家中から、伊賀御歩行は「藤堂和泉守様御家中」や「藤堂和泉守様御領分伊州阿拝郡上軽村郷土」<sup>(29)</sup>から養子を迎えた例が挙げられる。なお、三御歩行は井伊家家臣団の最下層ではない。その下には、足軽・中間などの軽輩がいたが、彼らは分限帳・「由緒帳」に記されていないので、本稿の分析から外すことにした。<sup>(30)</sup>

## 二 家臣の石高分布

### (一) 分限帳の給禄記載

文政十三年（一八三〇）の家臣団の中で、給禄が判明する家臣の人数は、「分限帳」に七七四人、「定府分限并子共年付帳」に一三三人<sup>(31)</sup>、「伊賀歩行・七十人歩行分限帳」に八十四人で、計九九一人が記されている。俸禄の支給形態には、①知行を表わす「石」、②切米としての「俵」と扶持米を合わせて支給する形式、および③給金

としての「五両二分」と扶持米を合わせて支給する形式の三種類がある。ただし、③は「由緒帳」によれば、いずれ②に切り替えることになるので、蔵米取家臣と見なしてもよからう。給禄の支給方式で分類すると、知行取家臣が五四九人、蔵米取家臣が四四二人である。蔵米取家臣は、給禄を知行の「石」に換算し、知行取家臣と一緒に検討する。給金を与えられた者は、当時の米価に基づいて換算した。<sup>(32)</sup>

なお、一部の家臣には「御役料米」（俵）や「御役料金」（両）に関する記載が見られる。これは小知の家臣に対する手当、および勤功への御褒美という形で与えられていた。<sup>(33)</sup>しかし、グラフにすると、役料を入れても入れなくても分析結果に影響を与えることがほとんど見られないので、役料に関する検討は省略する。

まず、一〇〇石を単位に知行取家臣・蔵米取家臣を組み分けすると、表2の通りである。表2に基づいて家臣の石高分布をグラフにすると図1になる。

家臣団全体の給禄分布は、小禄の者が多く、高禄になるにつれ人数が少なくなる傾向にある。そのうち、百石未満が五二〇人（約五十三%）、百石以上二百石未満が二九三人（約三十%）で最も多く、家臣団の八割以上を占めている。なお、千石以上の階層は二十四人（二%）であり、二百石以上千石未満のどの階層よりも多いように見えるが、それは千石以上一万石以下の者の合計であることに注

表2 文政十三年井伊家家臣の石高分布

石高（石）	知行取人数 （人）	蔵米取人数 （人）	合計（人）
100 未満	103	418	521
100 ～ 199	269	24	293
200 ～ 299	77	0	77
300 ～ 399	44	0	44
400 ～ 499	14	0	14
500 ～ 599	4	0	4
600 ～ 699	6	0	6
700 ～ 799	3	0	3
800 ～ 899	3	0	3
900 ～ 999	2	0	2
1,000 以上	24	0	24
総人数	549	442	991

註

彦根城博物館蔵「分限帳」「定府分限并子共年付帳」「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」による。俵・扶持・両は知行の「石」に換算した。

意すべきである。

一方、給禄の支給の仕方によって家臣の分布傾向を検討した結果、知行取の多くは百石以上であったのに対し、蔵米取はほとんど百石未満であった。知行取のうち、百石台が二六九人（知行取家臣の約四十九％）で最も多く、百石未満が一〇三人（同約十九％）、二百石台が七十七人（同十四％）でこれに次ぐ。

次に、家臣団全体の八割以上を占めた二百石未満の階層について

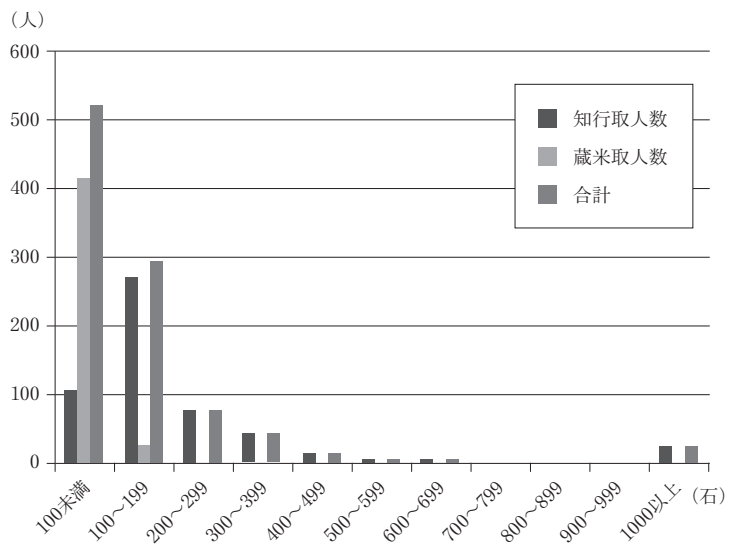


図1 井伊家家臣の石高分布

検討する。二百石未満の知行取・蔵米取を二十石ごとに組分けすると、表3の通りである。これに基づいてグラフにすると図2になる。二百石未満の知行取は全て五十石以上である。そのうち、一二〇～一三九石が一〇一人（二百石未満知行取の二十七％）で最も多く、百～一一九石が七十七人（同約二十一％）、一四〇～一五九石が

七十四人（同約二十％）でこれに次ぐ。一方、蔵米取は全て一四〇石未満の階層に分布している。そのうち、二十〇三十九石が二〇六人（蔵米取の約四十七％）で最も多く、四十〇五十九石が一七五人（同約四十％）でこれに次ぐ。

以上のことから、知行取・蔵米取の石高分布の特徴は次のようにまとめることができる。知行取は百石台が百石未満より多く、特に一二〇石に人数が集中していることが特徴である。一方、蔵米取は百石未満に集中しており、そのほとんどは二十石以上六十石未満であった。こうした分布傾向が形成された原因については、次の項で述べる。

表 3 二百石未満の家臣の内訳

石高（石）	知行取人数（人）	蔵米取人数（人）
20 未満	0	4
20 ～ 39	0	206
40 ～ 59	15	175
60 ～ 79	37	23
80 ～ 99	51	10
100 ～ 119	77	0
120 ～ 139	101	24
140 ～ 159	74	0
160 ～ 179	13	0
180 ～ 199	4	0
総人数	372	442

註  
彦根城博物館蔵「分限帳」「定府分限并子共年付帳」「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」による。俵・扶持・両は知行の「石」に換算した。

1 「定禄」制と知行取家臣  
十八世紀後半、井伊家は知行取家臣を対象とする「定禄」制を実

(二) 井伊家の給禄制

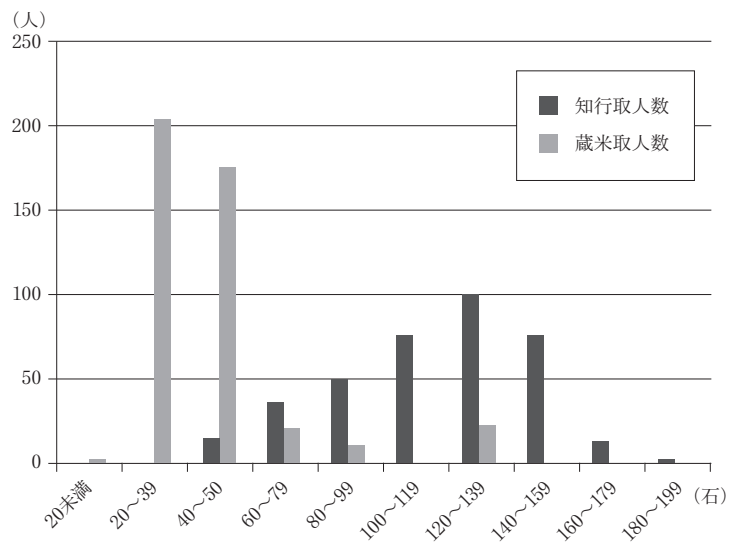


図 2 二百石未満の井伊家家臣の石高分布

施した。このことは知行取の石高分布に大きな影響を与えた。天明四年（一七八四）正月朔日付の「御書付之写」によつて、養子・幼年家督による減知の最低額として「定禄」が決められた。二五〇〇石以上で代々重職を勤めた八家<sup>35</sup>はそれぞれの知行高を定禄とし、何があつても減知されないことが保証された。一方、二四〇〇石以下の家臣は知行高に応じ、千石く二四〇〇石は千石、三百く九五〇石は三百石、一二〇く三百石は一二〇石を「定禄」とした。他方、当時一二〇石未満の家臣に対しては、定禄一二〇石を目途として加増することが決まつた<sup>36</sup>。こうした政策を実施された理由を示す史料は管見の限り見当たらない。しかし、養子や幼年家督などに伴う減知が家臣団の困窮化につながるであろう事実を考えると、定禄制は貧困に悩まされた家臣への救済策であつたと思われる。

一二〇石未満の家臣に対する加増は、天明六年（一七八六）から始まつた。安永三（一七七四）年に家督相続した岡本半右衛門の由緒書には、「天明六丙午年十一月廿六日、定録（禄―筆者註）階下ニ付年々御割合を以百貳拾石之高ニ御取立可被遊段被仰付候」と記されている。彼は当時百石取であつたが、寛政七年（一七九五）七月二十二日に「貳拾石之地形被下置、高百貳拾石<sup>37</sup>」となつた。

ところが、「定禄」制は享和元年（一八〇一）に見直されることとなつた<sup>38</sup>。これ以降、天死や養子による減知は定禄による制限を受けなくなり、定禄一二〇石を目指す加増も中止となつた。寛政十年

（一七九八）に家督した福村八衛門の由緒書には、「享和元酉年三月朔日、定録御止ニ付、積米之分三拾俵地形ニ御直シ、高百石ニ被仰付候」と記されている<sup>39</sup>。結果、天明六年当時一二〇石未満の家臣を全員一二〇石に引き上げることはならなかつたのである。

こうした「定禄」制による加増は、家臣の石高分布にどのような影響をもたらしたのだろうか。文政十三年（一八三〇）当時、一二〇石以下の家臣は二八一人いたが、彼らの由緒帳に基づいて「定禄」の影響を受けた人数を調べると、次の三点が指摘できる。

第一に、「定禄」制は在国の知行取家臣を対象として施行されたことである。定府家臣および定禄実行期間（天明六年く享和元年）において、幼年家督・父兄犯罪などの理由で扶持取となつた者は「定禄」制による加増の対象外であつた。

第二に、蔵米取家臣のうち、特例として「定禄」制による加増を受けた者もいたことである。①延宝六年（一六七八）に追放され、元禄十年（一六九七）に帰参して扶持取となつた者は、享和元年に切米と積米を地形に直して、六十石・七十石の知行取となつた。②初代が御小姓に取り立てられ、百俵五人扶持を給された者は、天明七年（一八七七）に切米と積米を地形に直し、一二〇石取となつた。

第三に、一二〇石以下の家臣のうち、約六十五％は「定禄」制の影響を受けたことである。文政十三年当時、在国の五十石く一二〇石取は合計二二一人である。そのうち、「定禄」制による加増を受

けた者は、一二〇石取八十四人のうち六十人（七十一％）、一一〇石取十七人のうち九人（五十三％）、百石取四十三人のうち二十三人（五十三％）、九十石取十三人のうち九人（六十九％）、八十石取二十七人のうち二十一人（約七十七％）、七十石取二十人のうち十三人（約六十五％）、六十石取七人のうち七人（一〇〇％）、五十石取十人のうち二人（二十％）で、計一四四人である。

以上見てきたように、「定禄」制によつて、天明六年当時百石未満の在国知行取家臣は八十〜一二〇石取、帰参の扶持取家臣は知行六十石〜七十石取となつた。こうした中で、百〜一二〇石の階層は激増したが、その一方、百石未満の家臣は激減したのである。しかし、享和元年以降、「定禄」制の廃止により、養子・幼年・犯罪などによつて減知された者や新知取立によつて百石未満の家臣が再び増えることとなつた。

## 2 「本高」と蔵米取家臣

蔵米取家臣の中で、御小姓・御中小姓・御騎馬徒・御歩行・伊賀御歩行、および七十人御歩行は、組ごとに基本的な給禄が設定されていた。それは「本高」と呼ばれた。御中小姓以下の多くは召し出された直後、本高より低い給禄を与えられ、成年・江戸詰・勤功によつて加増され、本高を与えられた。また、勤功により加増されると、本高より高い給禄をもらうことも可能であつた。

各組の本高は以下の通りである。御小姓の本高は、在国が百俵八人扶持（知行一三六石に相当する）で、定府が百俵五人扶持（一二一石五斗）であつた。御中小姓の本高は七十俵六人扶持（九十七石）であつたが、家督直後は二十六俵六人扶持（五十三石）あるいは四十俵六人扶持（六十七石）を与えられた。在国の御騎馬歩行は四十俵四人扶持（五十八石）が本高であつたが、家督直後は二十六俵四人扶持（四十四石）を与えられることが多かつた。一方、定府の御騎馬歩行は全員二十六俵三人扶持（三十九石五斗）を与えられた。三御歩行の本高は、御歩行は二十六俵三人扶持（三十九石五斗）、伊賀御歩行は四十俵三人扶持（五十三石五斗）、七十人御歩行は二十四俵三人扶持（三十七石五斗）であつた。十代で三御歩行に召し出された者は十俵三人扶持（二十六石五斗）を与えられた。<sup>④</sup>なお、定府御歩行のうち、幼年で五兩二分三人扶持を与えられた例もあるが、当時の米価によつて換算すると、その実収入は十俵三人扶持の蔵米取とほぼ同じであつた。

本高を知行に換算すると、御小姓を除き、御中小姓以下は全て百石未満であつた。蔵米取家臣の九割以上が百石未満だったのは、そのためであろう。なお、御騎馬徒・御歩行の中で、御鷹役・御右筆役を代々勤める家の嫡子や、馬術が優れるなどで新規に取り立てられた者は、組の本高にかかわらず、三〜十人扶持を与えられた。<sup>⑤</sup>各組の決まつた給禄が全て知行二十石以上であつたにもかかわらず、

二十石未満の者が存在したのはそのためである。

蔵米取家臣の給禄は「都而扶持ニ而格相立、切米ニ而増可申事」<sup>(43)</sup>と規定されており、扶持米の多寡は組によって異なり、勤功のある者は切米（俵）を以て加増された。注意すべきは、蔵米取家臣は加増分を次の代に残すことができなかったことである。この原則は跡式の継承が許された御中小姓や御騎馬徒にも適用された。「由緒帳」によれば、彼らが家督する時に父の「跡式」から継承した俸禄額は、組の本高あるいは家督直後の基本的な給禄を超えることはなかった。

### 三 井伊家の官僚制

#### (一) 七十人御歩行以上の役職就任状況

本節では、「役附帳」（彦根城博物館蔵、調査番号八六三）を用いて、分限帳で記されていないかった七十人御歩行以上の任職状況を明らかにする。「役附帳」には諸役職の在職者の名前が記されており、張り紙や追加記録がない。御弓鉄砲組頭の人名によれば、この史料は文政十三年（一八三〇）十一月十五日以降に作成したものと推定できる<sup>(44)</sup>。なお、文政十三年七月廿一日に御中老役に任命された広瀬美濃の記録がないが、その他の役職の記載は「由緒帳」の記録とほぼ一致しているので、広瀬の件は記録漏れであろう。

従来、「役附帳」は知行取の任職状況を記されたものとされてき

たが、しかし、分限帳や「由緒帳」と照らし合わせてみると、七十人御歩行以上の階層を記載対象としたことが判明した。表4は、「役附帳」に記された井伊家の諸役職への任職状況をまとめ、さらに、分限帳の記載に基づいて給禄の支給方式を明記したものである。

「役附帳」の記載内容は、①老中から於千代・於久・於登勢附人までの諸役、②弘道館役人、および③定府役人の三部分に分けられる。①②③を合わせて計五八一件が記載されているが、そのうち兼任による重複記載は八十六件で、実際に役職に任じた者は四九五である。このうち、①②は「分限帳」と「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」に、③は「定府分限帳」によって給禄の仕方を確認することができると。それによれば、「役附帳」の記載者は、知行取が三四一人、蔵米取が一二二人、給禄不明が三十二人である。給禄不明の者は、分限帳に給禄の記載がない者、および名前すら記されていない者が含まれている。その身元を由緒帳によつて確認すると、彼らは知行取家臣の次三男、および御歩行・七十人御歩行の嫡子であることが判明した。

以下では、①②③それぞれの記載内容について、任職者の身元を分限帳・「由緒帳」に基づいて検証しながら分析する。

まず、①について見てみよう。①には四五九件の記載があるが、そのうち兼任による重複記載は六十四件であり、実際に任職した者は三九五である。そのうち、知行取は二七八人、蔵米取は九十三

人、不明は二十四人である。

老中（御家老）以下小役人御着到附役までの諸役は、知行取が就任することがほとんどであった。厳密な規定によるものではないが、諸役職に就任する者の給禄は大体次のようにまとめることができる。二千石以上の家臣は老中、中老および旗奉行、四百石以上の家臣は用人や鍵奉行を勤めた。二五〇石以上の家臣が弓鉄砲組頭、母衣役、城中番頭、十一口番頭、側役、鷹用向頭取、町奉行、筋奉行、仕送奉行、評定目付、侍宗門改奉行・武具預相兼、郷中宗門改奉行、馳走奉行、小納戸、御城使役、江戸中屋敷留守居役、大津蔵屋敷奉行を勤めた。二百石以下の家臣は目付、普請奉行、作事奉行、御普請御着到附役、元方勘定奉行、金奉行、大津蔵屋敷目付、京都留守居役、賄地方旅方兼帯、賄、彦根江戸納戸、鳥毛中間頭、船奉行、鉄砲奉行、鉄砲玉葉奉行、玉葉中間頭、竹奉行、細工奉行、御用米蔵奉行、松原蔵奉行、佐野奉行、借用役、皆米札奉行、代官役、侍着到付、城中十一口着到付、足輕辻着到付、小役人着到付を勤めた。

この中で、注目すべきは、二五〇石以上の家臣の多くが番方と役方を兼任したことである。中老は旗奉行、弓鉄砲組頭は御用人・側役・鷹用向頭取・町奉行・筋奉行・侍宗門改奉行武具預相兼・馳走奉行・小納戸・御城使役、母衣役は江戸中屋敷留守居役・普請奉行・大津蔵屋敷奉行を兼任した。一方、複数の役方を兼任した例もある。筋奉行は郷中宗門改奉行、細工奉行は弓矢預加役、松原蔵奉

行は大津蔵目付、船奉行は代官、玉葉中間頭は小役人着到付をそれぞれ兼任した。

小役人着到付役の次に、庭奉行以下櫛役までの諸役が記されている。これらは二百石以下の知行取と御扶持方取衆・御中小姓衆・御騎馬徒衆などの蔵米取が勤めた。櫛役の次に記された装束附役以下の諸役は、侍と御歩行・七十人御歩行が異なる役を勤め、役職と所属階層が対応する傾向が見られる。<sup>(46)</sup>すなわち、奥内用達役から作事方改役までの諸役は御歩行・七十人御歩行が勤めた。井伊家当主の子供の世話をする役として、附人は二百石以下の知行取、近習・伽頭は三百以下の次三男、伽・賄は御歩行あるいは七十人御歩行の嫡子が登用された。

次に②弘道館役人について見てみよう。②には合計五十一件の記載があるが、そのうち重複記載が十一件である。実際の任職者は四十人であり、そのうち知行取は二十一人、蔵米取は十三人、不明は六人いた。

弘道館は熊本細川家の時習館の制を倣って寛政十一年（一七九九）に設立され、文政十二年（一八二九）までは稽古館と称された。知行取家臣の家督および部屋住で十五歳から三十歳までの者は授業に出席することが義務付けられた。<sup>(47)</sup>千石以上の家臣は弘道館頭取、四百石以上の家臣は稽古奉行、百石く三五〇石の家臣は物主書物奉行を務めた。そのうち、弘道館頭取と稽古奉行に千石以上の嫡子が

表 4 文政十三年諸役職の在職者一覧 (4/4)

	役職	記載数 (件)	重複 (件)	知行取 (人)	蔵米取 (人)	不明 (人)
③ 定府役人	番足輕支配	3	0	3	0	0
	側役	1	1	0	0	0
	小納戸 (うち 1 人兼帯)	3	1	2	0	0
	御城使	1	1	0	0	0
	八町堀屋敷留守居	1	1	0	0	0
	千田谷屋敷留守居 (うち 1 人加役)	2	0	2	0	0
	取次	0	0	0	0	0
	使番	3	0	3	0	0
	目付	2	0	2	0	0
	奥方附人	2	0	2	0	0
	大御前様附人	2	0	2	0	0
	守真院殿附人 陸奥守殿御附人	2	0	0	0	2
	賄	2	0	2	0	0
	普請作事奉行	3	0	3	0	0
	中屋敷目付	1	0	1	0	0
	上屋敷見廻り役	0	0	0	0	0
	中屋敷見廻り役	1	0	1	0	0
	八町堀屋敷見廻り役	0	0	0	0	0
	奥方賄	2	0	1	1	0
	守真院殿賄	2	0	2	0	0
	音信役	3	0	2	1	0
	内目付	2	0	2	0	0
	旅道具預り	2	1	1	0	0
	儒者	2	0	1	1	0
	医師	1	0	0	1	0
	茶道頭	0	0	0	0	0
	直勤書記役 (うち 1 人兼帯)	3	3	0	0	0
	右筆頭	2	0	2	0	0
	留書役	6	0	4	2	0
	留書役 年回繰出シ用懸り	3	3	0	0	0
	右筆役	5	0	1	4	0
	馬役	0	0	0	0	0
	奥用役	0	0	0	0	0
	櫛役	4	0	0	4	0
	桶量奉行	1	0	0	1	0
	鷹方	0	0	0	0	0
	御城使方手附役	1	0	0	1	0
	於知方附人	1	0	1	0	0
	於充方附人	1	0	1	0	0
	於尊方附人	1	0	1	0	0
	合計	71	11	42	16	2
	以上合計	581	86	341	122	32

表 4 文政十三年諸役職の在職者一覧 (3/4)

	役職	記載数 (件)	重複 (件)	知行取 (人)	蔵米取 (人)	不明 (人)
①在国役人 (つづき)	櫛役	7	0	4	3	0
	装束附役	2	0	0	2	0
	客立之節給仕役	8	0	8	0	0
	糸譜用掛	1	0	0	1	0
	奥内用達役	6	0	0	6	0
	江戸桶疊奉行	3	0	0	3	0
	鉄砲方臺師役	1	0	0	1	0
	作事方元ノ役改証判役	4	0	0	4	0
	疊奉行	4	4	0	0	0
	馳走道具頭	2	0	0	2	0
	作事方門改役	6	0	0	6	0
	筑後方附人	1	0	1	0	0
	同所近習	3	0	0	0	3
	同所賭	2	0	0	2	0
	同所伽添役	2	0	0	2	0
	同所伽	3	0	0	0	3
	鉄三郎方・銓之介方附人	2	0	2	0	0
	※鉄三郎方伽頭	4	0	0	0	4
	同所伽役	2	0	0	2	0
	銓之介方伽	4	0	0	0	4
	豊前方・東之介方附人	2	0	2	0	0
	同所賭	4	0	0	4	0
	同所伽頭	6	0	0	0	6
	同所伽	2	0	0	0	2
	善住院賭・直心院賭	2	0	0	2	0
	於千代・於久・於登勢附人	2	1	1	0	0
	合計	459	64	278	93	24
②弘道館役人	弘道館頭取	7	1	2	0	4
	稽古奉行 (うち 1 人添役)	3	2	0	0	1
	物主奉行 (うち 2 人添役)	5	1	4	0	0
	学問方	4	3	0	1	0
	素読方	17	0	8	8	1
	手跡方	6	0	4	2	0
	諸用役	3	0	3	0	0
	礼節方	1	0	0	1	0
	兵学方	0	0	0	0	0
	一騎前	2	2	0	0	0
	天文方	1	0	0	1	0
	医学会頭	1	1	0	0	0
	算学	1	1	0	0	0
	和学	0	0	0	0	0
	合計	51	11	21	13	6

表4 文政十三年諸役職の在職者一覧 (2/4)

	役職	記載数 (件)	重複 (件)	知行取 (人)	蔵米取 (人)	不明 (人)
①在国役人 (つづき一)	大津蔵屋敷奉行	2	1	1	0	0
	同所目付	2	0	2	0	0
	京都留守居役 (うち1人助)	2	0	1	1	0
	賄地方旅方兼帯	6	0	6	0	0
	賄	4	0	4	0	0
	彦根江戸納戸	7	0	7	0	0
	鳥毛中間頭	4	0	4	0	0
	船奉行	2	0	2	0	0
	※御船方加判	1	0	0	1	0
	鉄砲奉行	2	0	2	0	0
	鉄砲玉薬奉行	2	0	2	0	0
	玉薬中間頭	2	0	2	0	0
	竹奉行	2	0	1	1	0
	細工奉行	2	2	0	0	0
	御用米蔵奉行	3	0	3	0	0
	松原蔵奉行	8	2	6	0	0
	佐野奉行	1	0	1	0	0
	借用役	3	0	3	0	0
	皆米札奉行	3	0	3	0	0
	代官役	6	2	4	0	0
	侍着到付	4	0	4	0	0
	城中十一口着到付	4	0	4	0	0
	足輕辻着到付	3	0	3	0	0
	小役人着到付	3	2	1	0	0
	庭奉行 (うち1人添役)	2	0	1	1	0
	買上物改証判役	4	0	4	0	0
	内目付	10	0	5	5	0
	鷹餌割役	4	0	4	0	0
	鷹役 (うち1人*見習)	24	0	8	15	1
	儒者	4	0	1	3	0
	奉薬加役	2	0	2	0	0
	医師	1	0	0	1	0
	奥医師	8	0	7	1	0
	表医師	18	0	11	7	0
	祐筆頭 (うち1人加役)	4	0	2	2	0
	祐筆 (うち5人留書役)	14	0	7	7	0
	馬役頭取	3	0	3	0	0
	馬役 (うち1人*見習)	13	0	7	5	1
	鷹野先拂	5	0	4	1	0
	用使	8	0	8	0	0

表 4 文政十三年諸役職の在職者一覧 (1/4)

	役職	記載数 (件)	重複 (件)	知行取 (人)	蔵米取 (人)	不明 (人)
① 在国役人	老中 (うち 1 人見習)	7	0	7	0	0
	中老	2	0	2	0	0
	用人 (うち 1 人添役)	8	0	8	0	0
	旗奉行	2	2	0	0	0
	鍵奉行	1	1	0	0	0
	弓鉄砲組頭	35	6	29	0	0
	母衣役 (うち 1 人役母衣)	24	0	24	0	0
	城中番頭	6	0	6	0	0
	十一口番頭	11	0	11	0	0
	側役	10	9	1	0	0
	鷹用向頭取	2	2	0	0	0
	町奉行	2	2	0	0	0
	筋奉行	6	6	0	0	0
	筋奉行加役	0	0	0	0	0
	仕送奉行 (うち 1 人添役)	2	0	2	0	0
	評定目付	0	0	0	0	0
	侍宗門改奉行武具預相兼	2	2	0	0	0
	弓矢頭	0	0	0	0	0
	同加役兼帯	2	0	2	0	0
	郷中宗門改奉行	3	3	0	0	0
	馳走奉行	2	2	0	0	0
	小納戸	10	6	2	2	0
	御城使役	4	4	0	0	0
	江戸中屋敷留守居役	3	3	0	0	0
	目付	13	0	13	0	0
	普請奉行	2	2	0	0	0
	作事奉行	4	0	4	0	0
	※御普請御着到附役	3	0	3	0	0
	元方勘定奉行	3	0	3	0	0
	金奉行	3	0	3	0	0

註

- (1) 役職名および任職者の記載件数は「役附帳」による。この表の②弘道館役人と③定府役人といった分類は史料の記述によるものである。①に当たる諸役職は特定の分類がなされていなかったが、すべて国元にある役職なので、便宜上、〈在国役人〉という見出しをつけた。
- (2) 知行取・蔵米取は「分限帳」「定府分限帳」「伊賀御歩行七十人御歩行分限帳」による。「不明」というのは、分限帳に給禄が記載されていない者、および分限帳に登録されていない者である。
- (3) ※印は、役職名の誤記や未記載があったものを示す。正しい役職名は「由緒帳」によって補足した。

就任した例も見られる。学問方は儒者、医学会頭は奥医師が兼任した。素読方以下の諸役は、二百石以下の家臣と蔵米家臣のうち、学問に優れた家臣が勤めた。

最後の③定府役人には合計七十一件の記載があり、そのうち重複記載が十一件である。実際の任職者は六十人で、そのうち知行取は四十二人、蔵米取は十六人、不明は二人いた。

番足輕支配は二百石以上の家臣が勤めており、江戸中屋敷・八丁堀屋敷の番足輕を支配しながら、側役・小納戸・御城使・八町堀屋敷留守居を兼任した。千田谷屋敷留守居・使番・目付・奥方附人・大御前様附人、賄、普請作事奉行、中屋敷見廻り役、奥方賄、守真院殿賄、音信役、内目付、旅道具預り、直勤書記役、右筆頭、留書役、右筆役、於知方附人、於充方附人、於尊方附人には、二百石未満の知行取が就任するのがほとんどである。儒者と医師は全て御騎馬徒以上であった。櫛役は御騎馬徒、桶置奉行・御城使方手附役は御歩行が勤めた。他に、守真院殿附人・陸奥守殿御附人が二人記されているが、分限帳・「由緒帳」には彼らの名前が見当らない。守真院は仙台を本拠地とする伊達陸奥守重村の娘で、井伊家十代目当主直幸の世子直富の正室となつたので、この二人は伊達家から連れてきたのであろう。

## (二) 諸役職に対する就任率

井伊家家臣の諸役職に対する就任率は、分限帳および「役附帳」の記載内容によれば次の通りである。分限帳に登録された知行取(荒地取郷士を除く)は在国・定府を合わせて五四五人おり、そのうち「役附帳」に登録された者は三四一人であり、諸役職に対する就任率は約六十二・五％である。一方、蔵米取は在国・定府で計四二三人おり、そのうち御騎馬徒以上は二五六人、御歩行以下は一七七人である。「役附帳」に登録された蔵米取は計一二二人で、諸役職に対する就任率は約二十八％である。そのうち、御騎馬徒以上の就任者は七十三人で就任率が二十七・四％、御歩行以下の就任者は四十九人で就任率が二十七・六％であるので、就任率における侍と三御歩行の違いはほとんどない。「役附帳」に記された諸役職は、一部番方も含まれているが、役方が圧倒的に多い。蔵米取家臣が勤めたのは全て役方であったので、「役附帳」に登録されていない者は、井伊家当主が外出する時の供連れなどの番方の仕事をして見たと見てよいだろう。

一方、知行取の組編成はどのようなものだったろうか。分限帳と同じ時期に作成された「土組附帳」(彦根城博物館蔵、調査番号八六二)によれば、在国の知行取は、①土組、②諸役職の就任者、③御留守居組、④外組に分けることができる。①は木俣土佐組・庵原主税助組・小野田小一郎組・宇津木下総組・横地佐平太組の五組

に編成されている。五組の組士は合計二四七人であり、在国知行取の約五割を占めている。組名はその組を支配した士大将の名前によるものであったが、「由緒帳」には士組と記されたこともある。この五組は出陣する時に先手二備、左・右備および後備を構成するものであったので番方であるが、組士のうち役方の役職に任ぜられる者もいた。<sup>②</sup>は御中老を筆頭とする諸役職であった。<sup>③</sup>は御代官役・御城中御番頭・十一口御番頭・御用米御藏奉行および松原御藏奉行が所属しており、軍事動員する時に領地に残る者たちであった。以上のどれでもない者は<sup>④</sup>に入れられた。なお、御家老・士大将および医者はこの史料に記されていない。

「士組附帳」と「役附帳」の記載を照らし合わせてみると、第一に、医者とは諸役職に就任する者を除き、残りの知行取家臣はほとんど番方であったことが指摘できる。十八世紀末の徳川將軍家の例でいうと、旗本のうち、番方でも役方でもない無役の者は約三十九%を占めた。<sup>⑤</sup>それと比べると、井伊家における無役の者は極端に少なかった。第二に、番方・役方の兼任が多かったことは注目すべきである。徳川將軍家でも、戦国時代には番方と役方の兼任が珍しくなかったが、近世に入ってから行政職である役方の重要性が高まり、専任者を置くようになった。それとともに、番方の編成は出陣する時の先手備・旗本備のような形から、大御番組・御小姓番・御書院番・新御番・小十人組といった五番方に編成されるようになった。<sup>⑥</sup>

それに對し、井伊家の番方編成は近世初期の古い形が残ったままであった。

これまで述べてきた中で、井伊家の官僚制の特徴として、知行取の諸役職に對する就任率が高く、兼任も多いこと、また、藏米取の一部に番方・役方を問わず部屋住が登用されたことなどが挙げられる。最後に、こうした登用制が形成された背景として、近世初期からの家臣の人数変化を見てみよう。

井伊家は慶長六年（一六〇二）に近江国十八万石を領有した。その翌年の分限帳には知行取三〇一人、切符衆一〇六人、餌指四人の名前があり、組の総人数として足輕五百人・中間四百人が記されている。<sup>⑦</sup>一方、文政十三年（一八三〇）の家臣団は、分限帳の記載によれば、足輕以下を除いて、知行取が五四五人（荒地取郷士を除く）、藏米取が四四三人いた。慶長七年以降の家臣の増減は、現存する分限帳が少ないので詳しく検討することが困難である。しかし、文政十三年の状況と慶長七年のそれと比べると、領地は約一・七倍になったが、知行取は約一・八倍、藏米取は約四・二倍となったと言える。

知行取は、領地の拡大に従い、それ相應の増員がなされた。彦根城下の拝領屋敷の場所を記す「家並帳」によれば、慶安四年（一六五二）に知行取は少なくとも四八五人いた。<sup>⑧</sup>その中に定府家臣が含まれているかどうかは不明であるが、十七世紀半ばから大幅

な増員がなされなかったことは確かであろう。「由緒帳」によれば、増員の理由として、近世初期には牢人の召し抱えや御中小姓以下の昇格も挙げられるが、その主な原因は次三男による分家の取立であった。十九世紀以降でも、定府を願い出た知行取の次三男や御騎馬徒に新知を与えた例が見られる。

一方、蔵米取は十八万石当時と比べて大幅な水増しがあつたように見えるが、果たしてそうであろうか。文政十三年当時、蔵米取のうち、足輕以下から昇格した伊賀御歩行と七十人御歩行は八十四人、家臣の子息で御騎馬徒・御歩行に召出された者は一二二人いた。それ以外の蔵米取家臣は二三七人で、慶長七年の約二・二倍であり、加封の倍率をやや上回つた程度である。蔵米取の増員は、「由緒帳」によれば家中の次三男に分家を取立させた例が多いが、浪人・陪臣の取立、大奥老女の勤功を賞して名跡を残させた例もある。

以上述べてきたように、領内支配機構が整備されるに従い、家臣団の強化を図る大名家が多いなかで、井伊家における家臣の新規取立はかなり控えめであつた。知行取に関しては、戦国期ないし近世初期に一般的だつた番方・役方の兼任体制をそのまま保持していた。一方、蔵米取に関しては、部屋住の登用や足輕以下の者の昇格によつて人員を確保していた。こうした施策は財政難によるものか、あるいは旧例を重んじたためか、定かではない。しかし、結果として、無役の家臣を最小限にとどめることができたことは評価に値す

る。

#### おわりに

本稿では、溜間詰の大名の一例として、彦根井伊家の身分構造について分析を行つた。最後に、井伊家の事例を十九世紀前半の萩毛利家（大広間、三六万九千石）・尾張徳川家（大廊下、六一万五九〇〇石）のそれと比較することによつて、大名の家臣団の身分構造についての大きなイメージを提示することとしたい。

まず、井伊家家臣は所属階層において侍と三御歩行に大別されていた。両者は、相続・御目見の仕方・役職の任免において大きな違いがあつた。注意すべきは、徳川取立大名の家臣団編成は、徳川將軍家の番方・役方の組織を模倣して作られることが多いと考えられがちであるが、井伊家はそうではなく、独自の組織を有した。この点においては、同じ徳川取立大名の尾張徳川家と異なり、旧族大名の萩毛利家に近いと言わねばならない。

次に、井伊家の家臣は、給禄の支給方式において知行取と蔵米取に区別された。両者は、諸役職に対する就任率・騎馬の資格において異なつた。知行取と蔵米取を合わせて、家臣団の全体的な石高分布の傾向として、千石以上の家臣が僅少で、二百石未満の家臣が約七割を占めた。この点においては、領地の規模や家臣団の人数が異

なるものの、萩毛利家や尾張徳川家と共通する。すなわち、三家において、千石以上の石高は、家老や士大将を勤め、広大な領地と自前の家臣団を有した階層を示す基準として使われていた。一方、千石未満の家臣に関しては、給禄で役職の就任・生活様式などが明確に規定されているわけではなかったが、三家ともに物頭の給禄は二百石以上が基本であったので、それ未満は平侍と見てよいだろう。

このように、所属階層・給禄・相続・御目見・役職・騎馬の資格は、いずれも近世武士の地位を評価する基準であった。注意すべきは、家臣団全員がこれらの基準で同じ評価を得たわけではなかったことである。彦根井伊家の場合、三御歩行は全て蔵米取であったが、侍は知行取と蔵米取の双方を含んでいたのである。侍は徳川將軍家という御目見以上の資格を有し、知行を与えられた者はさらに騎馬が許されていた。したがって、全ての基準において優位であったのは知行百石以上の侍のみで、それ未満は基準ごとに評価が異なり、地位の不整合<sup>(56)</sup>があった。家臣団の下層部に地位の不整合があったのは、萩毛利家や尾張徳川家と共通する。ただし、大名家ごとに御目見や騎馬の資格などに関する基準が異なるため、地位の不整合がある家臣の割合は異なる<sup>(57)</sup>。

また、井伊家では、御歩行以上の階層において、部屋住で召し出された者が約一割を占めた点において、尾張徳川家と共通する。徳川將軍家や多くの大名家では、十七世紀半ば以降、財政上の理由に

よって同じ家から複数の人を奉公させることが困難となった<sup>(58)</sup>。井伊家は十七世紀末以降、家臣に対して上げ米・半知を何度も発令してきたので、他の大名家と比べて格別に豊かであったわけではない<sup>(59)</sup>。それでも部屋住の者を多く登用できたのは、近世初期の藩政機構の整備過程において家臣の増員を控えたこと、さらに家督時に夭死・幼年家督など様々な理由で減知する慣例を設けたので、減知分を部屋住で奉公する者の給禄に当てられたためと考えられる。

以上の分析によつて、近世の武士は、高禄な知行取かつ御目見以上である騎士と、低禄な蔵米取かつ御目見以下である歩兵といったように、単純に把握できる社会階層ではないということが明らかにになった。地位の不整合がある家臣は、武士らしく生きることができず、役職の就任においてもままならないため、現状に対する不満を常に味わったと考えられる。しかし、こうした現象は幕末期の倒幕に参加したか否かに関わらず、三つの大名家に共通して存在したので、武士社会の内部に存在した矛盾を維新の変革と直ちに関連付けるのには慎重でなければならないだろう。また、大名家では、最幕末に至るまで目立った人材登用が無くとも、徳川將軍家のような「家」単位での登用ではなく、個人単位の奉公が認められていたことも注意に値する。これらの事象は、幕末維新期において、大名家臣が倒幕に身を投じることや、武士身分の崩壊を考える際、重要な背景を提供するものであると考える。

なお、史料制約により、本稿ではその実態について不明とせざるを得なかった荒地取郷士や足軽以下に関しては、今後の検討課題としたい。

## 注

(1) 明治維新史研究では、下級武士が貧乏で役職の就任についても世襲身分による厳しい制限があつたため、そのような現状に不満を持ったことに明治維新の原動力を求める論が多い。木村礎『下級武士論』（塙書房、一九六六年）に集大成された「下級武士論」やトマス・S・スミス『日本社会史における伝統と創造——工業化の内在的諸要因 一七五〇—一九二〇年——増補版』（大島真理夫訳、ミネルヴァ書房、二〇〇二年）が代表的なものである。加えて、園田英弘『西洋化の構造——黒船・武士・国家——』（思文閣、一九九三年）は最幕末の軍事改革において人材登用が行われたことが従来の身分構造の崩壊につながつたと論じている。

(2) 彦根井伊家に関しては小宮山敏和『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、二〇一五年）がある。他の大名家に関する主な研究書は、谷口澄夫『岡山藩政史の研究』（塙書房、一九六四年）、藩政史研究会編『藩制成立史の総合研究——米沢藩——』（吉川弘文館、一九六四年）、明治大学内藤家文書研究会編『譜代藩の研究——譜代内藤藩の藩政と藩領——』（八木書店、一九七二年）、金井圓『藩制成立期の研究』（吉川弘文館、一九七五年）、藤野保編『佐賀藩の総合研究——藩政の成立と構造——』（吉川弘文館、一九八一年）、原昭午『加賀藩にみる幕藩制国家成立史論』（東京大学出版会、一九八一年）、林董一編『新編尾張藩家臣団の研究』（国書刊行会、一九八九年）、藤野保編『藩体制の形成』（雄山閣、一九九三年）、高野信治『近世大名家臣団と領主制』（吉川弘文館、一九九七年）などが挙げられる。また、

各自治体史においても研究されている。

(3) 熊谷光子「近世大名下級家臣団の構造的分析——豊後岡藩を素材にして——」（『日本史研究』三一六号、日本史研究会、一九九八年、一〇四四頁）、磯田道史『近世大名家臣団の社会構造』（東京大学出版会、二〇〇三年）など。

(4) 前掲磯田、十三頁。

(5) それ以降は、幕末期の改革を通じて制度が次々と変化していき、従来の組織体制が変容した可能性があると考えられる。また、諸大名家で改革を実行する時期が一定しないので、比較が困難であると予想される。

(6) 拙稿「幕末萩毛利家の身分構造」『年報地域文化研究』第十七号、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻、二〇一四年、一五七—一七六頁。同「幕末尾張徳川家の身分構造」『年報地域文化研究』第十八号、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻、二〇一五年、一六〇—一九一頁。

(7) 中村直勝監修『彦根市史』上冊、彦根市、一九六〇年、四八二—五〇六頁。

(8) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第二巻、彦根市、二〇〇八年。

(9) 岸本覚「彦根藩と相州警衛」佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根市立教育委員会、二〇〇一年、十一—五十九頁。母利美和「近世大名家臣団の官僚制と軍制——彦根井伊家の場合——」『史窓』第六十九号、京都女子大学史学会、二〇一三年二月、二十三—五十九頁。

(10) 『新修彦根市史』第二巻、一二四頁。

(11) 「由緒帳」第一〇四十四号は彦根城博物館編『侍中由緒帳』（彦根城市教育委員会、一九九四年）現在、以下統刊）として出版されたものを利用した。第四十五号以下は、彦根城博物館が休館中だったため、群馬県立文書館所蔵「高崎藩井伊家史料」（請求番号P F 九〇〇二）の写真帳を利用した。なお、本稿では、「由緒帳」をはじめ、史料引用に際して旧仮名遣いや旧漢字は原文のままにする。ただし、仮名の合字や漢字の異体字は新字体などに改める。

- (12) 群馬県立文書館所蔵「高崎藩井伊家史料」(請求番号P F九〇〇二)の写真帳を利用。
- (13) 知行取のうち、土田甚五郎(三百石)の名前は張り紙で抹消されていないが、表1の知行取家臣から排除した。その理由は次のとおりである。甚五郎の名前は「隠居」の部分にもあり、「寅三十六歳」「他堅次父」と注記されている。他堅次は御扶持方取衆であり、「本知三百石、十五人扶持」と記されている。これらの記載によれば、甚五郎が文政十二年に隠居したことにより、他堅次が土田家を継いだことは明白である。甚五郎の名前が抹消されずに残っているのは、単なる作業のミスか、張り紙が脱落したなどの可能性が挙げられる。
- (14) 『侍中由緒帳』第七卷、四十二頁。沢村軍次(二百石)の先祖の由緒書には、「延宝六戊午年、不調法之御訴訟申上、七拾六人一統二御追放被仰付、元禄十丁丑年正月十一日、御勘気御赦免、帰参被仰付、難有奉存、二月廿三日ニ御当地江参着仕候。御切符四拾俵四人扶持拝領仕候」と記されている。
- (15) 御扶持方取衆の金子虎介は天保十年(一八四〇)に新知五十石を与えられたが、翌年に絶家となった。その由緒帳には、「家名断絶、武具・馬具欠所、苗字・大小御取上」と記されている(「跡絶帳」第六冊)。岡沢桂三(八十石)は、「父千歳不都合之筋共相聞江候ニ付、御吟味有之処、勝手向以之外持崩、誠ニ士官之道茂難相立、持馬ホ茂難飼立鉢ニ相聞江、不埒至極ニ付、御知行御取上、隠居被仰付」のために家督を相続した(「由緒帳」第五十号)。一方、「京都上使行列絵巻」(朝尾直弘編『譜代大名井伊家の儀礼』彦根城博物館、二〇〇四年、三七九頁)には、知行取の医者が駕籠に乗った姿が描かれている。
- (16) 『彦根市史』上冊、四八一〜四八二頁。
- (17) 例外として、一五〇石取小沢内蔵太の養子小沢剛八、定府の御小姓には二百石取の荻原丹下の養子兵吾が御小姓を勤めていることが挙げられる。
- (18) 「由緒帳」「跡絶帳」による。御小姓に任命される履歴は、嫡子の場合には

自らの由緒書の冒頭に記されているが、次三男の場合は自分で由緒書を提出することがなく、父兄の由緒書に記されている。

- (19) 『彦根市史』上冊、四七六頁。
- (20) 「跡絶帳」第五冊。湯本一藤太は文政七年(一八二四)に御騎馬徒として召し出されたが、同九年(一八二六)には父原太郎が役母衣に任じたために御中小姓に昇格した。
- (21) 『彦根市史』上冊、四七六頁。
- (22) 「分限帳」には嫡子五十三人、次三男一人、「定府分限并子共年付帳」には嫡子一人、次三男三人が記されている。次三男は一代切で登用された。
- (23) 吉田常吉『井伊直弼』吉川弘文館、一九六三年、四〇六頁。
- (24) 「由緒帳」第五四号。石原小七郎と石原権四郎は筑後棟御近習をやめた後、御騎馬徒衆になったと記されている。秋山武司に関してはそのような記述が見当たらないが、同じく御騎馬徒の由緒帳に載っているため、御騎馬徒の格式を有したと推察できる。
- (25) 「由緒帳」第六十号。小堀富之進の由緒書の冒頭を引用したが、分家取立の者を除き、伊賀御歩行はほぼ全員の由緒書に同じようなことが記されている。
- (26) 「由緒帳」第五十二号。
- (27) 役替の場所は「由緒帳」による。御目見は前掲『譜代大名井伊家の儀礼』に収録された「正月御礼式図」「朔望御礼式図」による。
- (28) 『侍中由緒帳』第十四卷、二六八〜二八〇頁。例外として、定府家臣の中で、木村忠太夫は七十人御歩行の惣領であったが、五十石取の養子となった。
- (29) 「由緒帳」第六十号。松居甚平、園川半太夫、村木久右衛門、小堀富之進は藤堂和泉守の家臣の子息であり、中鱗之介はその領内の伊州阿拝郡郷士の子息であった。
- (30) 足軽の実態については、母利美和「彦根藩足軽組の軍事編成と組織運営」『史窓』第六十九号、京都女子大学史学会、二〇一二年二月、二十七〜

六十七頁)に詳しい。

- (31) 表1によれば、蔵米取家臣の人数は計四四三人であるが、定府の御扶持方取衆の中で、大久保兵司は「定府分限并子共年付帳」で「家族ニ応シ壹人扶持ツ、被下置候」と記されている。その家族が何人いたか不明なので、分析から外した。

- (32) 「彦根藩切米扶持書上」藤井譲治編『彦根藩の藩政機構』彦根城博物館、二〇〇三年、三一六～三二四頁。最幕末の史料であるが、これによれば一人扶持は四俵二斗に換算することができた。一俵は四斗入りなので、四俵二斗は一石八斗であり、知行四石五斗に相当する。

- (33) 給金を与えられた者は全て定府であった。文政十三年当時、江戸では金一両で米一石を買うことができた(岩橋勝『近世日本物価史の研究』大原新生社、一九八一年、四六四頁)。一俵は四斗入りなので、米一石は二・五俵に相当する。一両で約一・九俵を買うことができた。五両二分で購入できる額は約十俵余で、知行十石余に相当する。

- (34) 「跡絶帳」第六冊。小沢内蔵太(一五〇石)は文化十四年(一八一七)二月二日に大殿様御小納戸役に任命され、同年十二月十九日「御役儀無滞相勤候ニ付、五拾俵御役料米被下置」た。

- (35) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第六卷、彦根市、二〇〇二年、八九七頁、史料五一四。二五〇〇石以上の八家は、木俣土佐・庵原助右衛門・長野百次郎・西郷軍之助・脇伊織・中野三季介・三浦内膳および宇津木弥平太である。中野以下の三人を除いた五人は当時家老を勤めていた。

- (36) 『新修彦根市史』第六卷、八九六～八九七頁、史料五一三。

- (37) 『侍中由緒帳』第八卷、三〇八～三二〇頁。なお、岡本半右衛門は文政元年に三十石を増されたため、「分限帳」では一五〇石取として登録されている。

- (38) 『侍中由緒帳』第二卷、二二四頁。当時御中老に任じた宇津木兵庫(四十石)の由緒書には、「享和元辛酉年二月廿一日、定録以後御止可被遊旨被仰

出候ニ付、於御用部屋内御書拝見被仰付候」と記されている。

- (39) 『侍中由緒帳』第十三卷、一一四～一二一頁。

- (40) 一二〇石取のうち一人、百石取のうち一人は由緒帳に見当たらないので、定録による加増を受けていたかどうか不明である。

- (41) 「伊賀歩行由緒帳」第六十号、園川丑太郎・鶴見万太郎の項。

- (42) 御騎馬徒のうち、御鷹向御用を勤めた松村丹五郎は三人扶持、御右筆を勤めた上林覚治は四人扶持、御儒者飯田貢の養子で「家芸」のために御直勤書記役見習を勤めた飯田一蔵は五人扶持を与えられた(「跡絶帳」第五冊「侍中由緒帳」第三十六号・四十五号)。また、浪人で高麗流八條家馬術が得意な伊藤佐馬太郎は文政八年(一八二五)に十人扶持を与えられ、同十三年に御騎馬徒に取り立てられ、十人扶持を加増された(「侍中由緒帳」第五十七号)。

- (43) 「被仰出候事共之留」『彦根藩の藩政機構』二三〇頁。

- (44) 『侍中由緒帳』第四卷、五三頁。『侍中由緒帳』第五卷、三十八頁。彦根城博物館蔵「物頭代々記」(調査番号三一四七〇)。

- (45) 母利美和は文政末年の「分限帳」と「役附帳」を用いて、「近世後期では給人四七五人の内、四一八人が『役儀』を担っており、病氣、家督相続後の幼年、家内財政困窮による役儀免除、謹慎処分による役儀罷免などの事情により、一部『役儀』に就かないものがあるが、基本的に適齢・適格であれば『役儀』に就くことが求められた体制であったと考えられる」と論じている(前掲母利「近世大名家臣団の官僚制と軍制」四十一頁)。しかし、本稿で明らかにしたように、この「四一八」という数字は、弘道館役人・定府役人を除いた総件数を示すものである。その主体は知行取であるが、兼任による重複記載や御中小姓以下の階層も含まれているので、給人すなわち知行取の任職率の論拠として使うには適さない。なお、給人の人数が本稿で提示した国知行取の人数と若干異なつたのは、文政十一年を基準にしたためと推測する。

- (46) 例外として、装束附役は御騎馬徒衆と御歩行が一緒に任職することが見られる。
- (47) 『新修彦根市史』第二巻、六二二～六二六頁。
- (48) 彦根市立図書館蔵「役人帳」。これは「役附帳」と同じ形式の史料であり、諸役の就任時期が記されている。後世の写本であるが、原本は記載の人名と就任時期から文政十三年九月二十一日頃に作成されたものと推定できる。番足軽支配の三人のうち、西郷精太・富田兵記については「中屋敷番足軽預ケ」、藤堂次郎太夫は「八丁堀屋敷番足軽預ケ」と注記されている。八丁堀屋敷は南八丁堀に位置する井伊家の蔵屋敷である。番足軽を江戸詰の足軽が勤めた可能性はあるが、関係史料が少ないため、その実態は不明である。
- (49) 『譜代大名井伊家の儀礼』四〇三頁。
- (50) 前掲母利「近世大名家臣団の官僚制と軍制」二五五～二五六頁。
- (51) 橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』風間書房、一九九三年、一一九頁。
- (52) 北元正元『江戸幕府の権力構造』岩波書店、一九六四年、一五〇～一五一頁、一六二～一六七頁。
- (53) 『新修彦根市史』第六巻、三五二～三六二頁、史料二三。他に、御扶持方取衆・但隠居共三十四人、御女房衆並下女共三十四人の名前も記されている。
- (54) 『新修彦根市史』第六巻、三九五～四〇六頁、史料二二七。
- (55) 前掲拙稿。
- (56) 森間清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、一九九三年、九五五頁。個人の社会的地位は富・権力・威信・知識など複数の構成要素から成り立っている。一つの構成要素で高くランクされる者が他の構成要素においても同等に高くランクされるような整合したパターンが見られるような時、地位の整合が存在するという。反対に、各要素において高低が様々で、要素間に正の相関が認められず不整合のパターンが見られる時、地位の不整合が存在するという。
- (57) 井伊家の場合、地位の不整合があつた者は約五割を占めていた。萩毛利家の場合、一六〇石未満の階層には御目見以上で騎馬の資格のない者や御目見以下の者が入り混じっており、地位の不整合が観察された。徒以上の家臣二四五六人のうち、一六〇石未満の者は二〇三六人であり、約八割を占めていた。一方、尾張徳川家の場合、役職の就任において足高制を実施していたので、持高と現高（足高を含む給禄）に分けて考える必要がある。持高の場合は、御目見以下の者に世襲が許されない者が多くいたので、地位の不整合の割合を算出することが困難である。ただし、御目見以上・以下の者が給禄で区別されたので、その点においては地位の不整合がほとんどないと推測できよう。御目見以上の階層には、騎馬の資格と給禄の多寡が噛み合わないため、地位の不整合が観察されたが、役職の就任によって騎馬の資格を手に入れることが多いので、不整合の割合は常に浮動していると思われる。その一方、現高の場合、百石未満の階層には御目見以上・以下の者や馬上・歩行の者が入り混じっており、地位の不整合が観察された。徒以上の家臣二六四〇人のうち、現高百石未満の者は九九二人であり、約四割を占めていた。
- (58) たとえば、徳川將軍家では「惣御番入」と称して、当主が番方・役方に就いている旗本の惣領・次三男を五番方の番士として登用する制度があつたが、十八世紀以降は当主が長年勤務することや武芸に優れることを条件とする「惣領番入」制に切り替えた（横山輝樹「惣領番入制度、その成立と意義——吉宗期の武芸奨励と関連して——」『日本研究』第四十五集、国際日本研究センター、二〇二二年、五十三～五十四頁）。福岡黒田家は十七世紀後半において、従来のように家臣の子息を全員召抱えることができず、知行取の子息に御歩行衆などを勤めさせるのが精一杯であるという法令を發布した（服藤弘司『相統法の特質』創文社、一九八二年、五一九頁）。
- (59) 『彦根市史』上冊、六二四～六二五頁。